

Medication adherence and associated factors in newly diagnosed hypertensive patients in Japan: the LIFE study

相良, 空美

<https://hdl.handle.net/2324/7363632>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (保健学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 相良 空美

論 文 名 : Medication adherence and associated factors in newly diagnosed hypertensive patients
in Japan: the LIFE study

(日本の地域住民における新規高血圧患者の服薬アドヒアランスの実態と
その要因分析: LIFE Study)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】

高血圧は脳心血管病の最大の危険因子であるが、わが国の高血圧有病者の約7割は管理不良とも報告されており、血圧管理不良者の減少は喫緊の課題である。海外の報告では、服薬アドヒアランスは血圧管理の良否とともに心血管病の発症・予後に関係することが報告されているが、我が国の高血圧患者を対象とした服薬アドヒアランスの実態に関する報告は少ない。そこで本研究では、全国11市町村の一般人口180万人以上からなるレセプトデータを用い、高血圧患者における服薬アドヒアランスの実態とその関連要因を明らかにすることで、効果的な介入方法の提案につなげることを目的とする。

【方法】

自治体の国民健康保険加入者で、新規に高血圧を発症した31歳~74歳の男女112,753人(男性:56,391人,女性:56,362人)を対象に、医療レセプトと医薬品レセプトを用い、新規高血圧発症後1年間の降圧薬服薬アドヒアランスを調べた。服薬アドヒアランスの指標には患者が処方された薬剤を期間内に服用した割合(Proportion of Days Covered; PDC)を用い、 $PDC < 0.8$ をアドヒアランス不良と定義した。さらに、性別、年齢層別、薬剤別、都市規模別、医療機関の規模別、併存疾患別に降圧薬服薬アドヒアランスを調べ、服薬アドヒアランスに影響を及ぼす要因の分析を行った。

【結果】

全体のアドヒアランス不良率は27.6%であった。アドヒアランス不良率は30代58.9%、40代52.3%、50代43.7%、60代24.2%、70代19.1%と、若中年者でアドヒアランス不良率が高かった。男女別、薬剤別ではアドヒアランス不良率に差はなかった。都市規模別においては小都市(37.7%)>地方都市(34.7%) \approx 中都市(34.6%)>大都市(25.5%)の順で、医療機関の規模別では大規模病院(36.2%)>小規模病院(31.3%) \approx 中規模病院(30.5%)>診療所(26.1%)の順でアドヒアランス不良率が高かった。併存疾患保有数別では、0(33.5%)>1(26.7%)>2(23.2%)>3(20.1%)>4+(18.0%)の順の不良率であった。

【考察】

自治体住民を対象とした大規模レセプトデータ研究により、新規に高血圧を発症し降圧薬治療が開始された高血圧患者の降圧薬服薬アドヒアランスの実態が明らかになった。低遵守の背景には、若中年者層、医療機関へのアクセスにつながる都市の規模、併存疾患保有による医療機関への同時受診が関連していることが示唆された。今後、この対象者層の服薬アドヒアランス改善に向けて、医師や薬剤師による患者教育、服薬支援の整備など、多方面からの介入が必要と考えられる。都市規模別、医療機関別の服薬アドヒアランスに関しては、その要因にはついてはさらに検討が必要である。

【結論】

本研究により、自治体住民における新規高血圧患者の服薬アドヒアランスの実態が明らかとなった。